

# 命短し、恋せよ乙女



映画監督 中江裕司

人にせよ、物にせよ、自然にせよ、恋しているから生きていけるのだ。恋こそが生きている証だ。

「ナビイの恋」は上映キャラバンという形で各地の公民館などを上映してまわっている。系満市で上映したとき、上映が終わって、一人の婦人が私を監督と知って近づいてこられた。六十代ぐらいの方だろうか。「実は私にもあったのよ。ずっと

実は映画監督としての仕事は映画が完成した時に終わっていて、その後は上映スタッフとして映画に関わることとなる。八重山、宮古地区での上映キャラバンでは私は映写技師として各島を回った。映写機材約百七十キロを抱えて各島を回る。女性スタッフ二人と私の三人での各島への連絡船への荷物の移動は大変だった。しかし、それに勝る刺激や楽しさが離島キャラバンにはある。

島々であつたと言っているほど反応が違うし、その生な手ごたえというのは那覇に居ては絶対感じられないことだ。私は島々からたくさんものを貰い、そこで貰ったものを映画という形にしてきた。今後そのつきあいは永遠に続いていくことだと思つた。

沖縄は今、いろんなことで注目されている土地だと思う。今まで基地、戦争という視点でしか語られなかった沖縄は自分たちのことを前向きに売り込むチャンスだと思つた。自分たちは辛かった。こんなにも被害者だ。そんなことを言っている場合ではないと思つた。前向きに自分たちのすばらしい所をアピールしなければならぬ。今はその時だ。

私は沖縄は豊かだと思つた。その豊かさを世界に言わなくてはなら

ぬ。私はその考えを離島キャラバンを経て強くした。物質的な豊かさではなく、風景や風土、そして本物の芸能がある。そして、その土壌に育てられた個性的な人々がいる。沖縄はこの豊かさに支えられていると思つた。本土からも、これらを求める移住者も多い。しかし、私たち沖縄県民自身がこの豊かさに気づいていない。

私はこの夏、サミットのオープニングフェスティバルの演出をすることなつていて。サミットでは沖縄県民はガマンすることも多いと思つた。おぼろげに、海の向こうの遠いところから、たくさんの方が来る事を嬉しく思い、歓迎したいと思つた。しかし、実際にサミットと言つた祭りに参加できるのは限られた人たちだ。だから私は一人でも多くの県民が参加出来る場を作れればと思つた。うまんちゅ力チャーシー大会と名付けたこの祭りは、出演者と観客の区別がない誰もが参加できる祭りだ。一人でも多くの人が平和を願い力チャーシーを舞ってくれることが世界に沖縄の豊かさを見せる事が出来ることになると思つた。七月二十一日、夜、名護の二十一世紀の森で皆さんをお待ちしています。いっしょに舞いましょう。

命短し、恋せよ乙女。私の作った映画「ナビイの恋」では、たまたま乙女は七十九歳だったが、年齢と恋は関係ない。本土の取材の人がよくお年寄りの恋愛映画を考へてくれましたねと言われるのが不思議でならない。つまり本土ではお年寄りは恋愛をしない、恋愛して欲しくない、というのが大前提らしい。それはおかしい話だ。恋心なんて誰にも止められない。恋愛に引退はないし、いつまでも現役でいられるのが恋愛のいいところだ。

初恋の人が忘れられなくて、先日会いに行つたのよ。「その後は涙で声がつもって話されませんでした。私もどうしていいかわからず、そのままになってしまいました。自分が作つた映画がフィクションを越えて、現実の世界と繋がっていくことに驚きを憶えました。その後また一人の婦人の方が来られて私に向かつてこう言われた。「私にも実はあったのよ。この間その彼が会いに来よつたのよ。」と、楽しそうに話された。何か救われる感じがした。